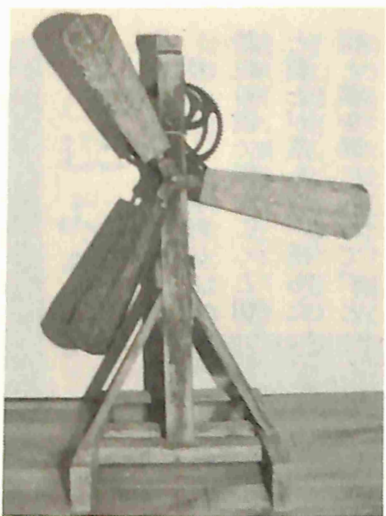


跳ねてもトサネコがあるので火がつかない、軽く、暖かく、燃えないので安心して薪切に精出せる。

○つい飛し機

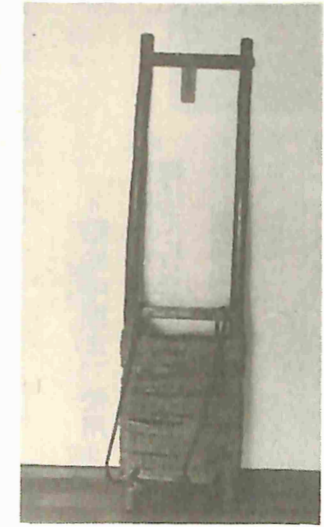
|| 昭和中期まで使用 ||



が別れる。その稲穂を扱押棒で、たたくと扱がばらばらになる。扱押棒でたたくと手が荒れて輝れが多く出たものである。
(注：ついは塵、芥類を指す)

○背負梯子

|| 大正初期から昭和中期まで使用 ||



背負梯子は自分で背でそうて稲を運搬する梯子である。人によって皆違う。力のある人、ない人で違う。稲を田圃の真中に稲乳穂として積んでおく、稲を一二把を一丸に束ねて、馬の荷鞍の来るところ迄で運ぶ。又は車の来るところ迄で運ぶに力のある人は

十九、力の弱い人が八丸背負梯子で運搬したのである。

○みのの(ケラ)

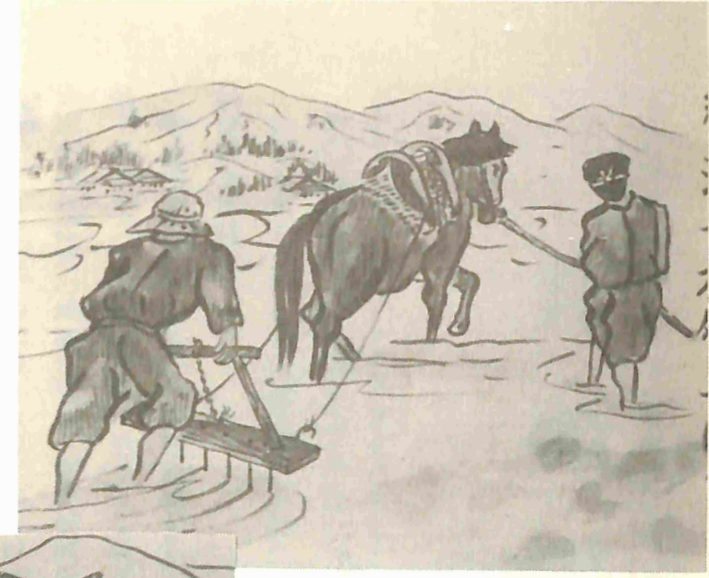
雨降に身を守るために使用したものである。そればかりではない。夏から秋迄毎日朝夕馬の草刈の時に使用したのである。朝の草刈は特に使用した。それは、朝草は露がたつぶりついており、それを刈って束ねて背負って来る時に「みの」を着て馬草を家に運んだもの。雨降は当然ながら冬にも使用した。冬は薪切に雪が降った時とか、昼食に「みの」を敷いたりした。「みの」は農家方が手造りしたものです。買う方もある。



古い農具について

戦後五十年の農機具の発展は唯々驚くばかりである。又、教育・文化・社会・医学・五十年にして、こんなに進歩した事は夢にも思われませんでした。特に農機具の事である。
戦後農具を使用して来たが、現在忘れようとしている。昭和の中期ごろ迄の農家は、どんなに苦勞して来たか、今考えてみるに、馬鹿らしい。古い農具を忘れないうちに寫眞を添えて、「かたりべ」に残しておくたい。

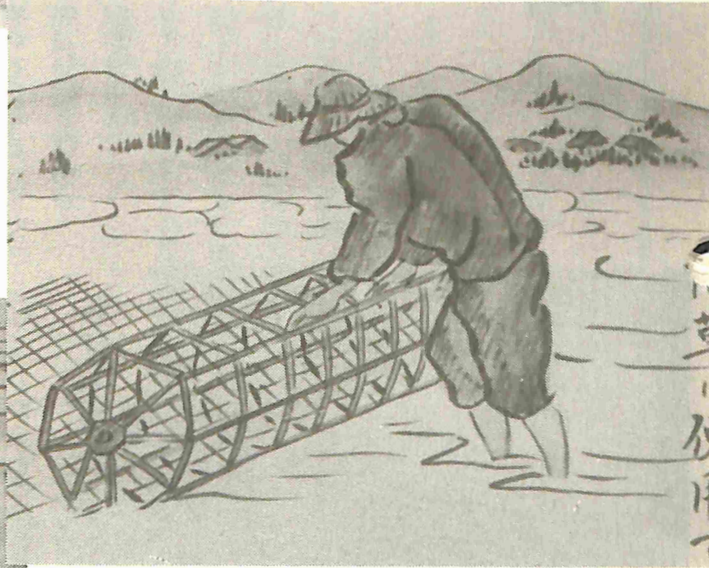
馬 鋤



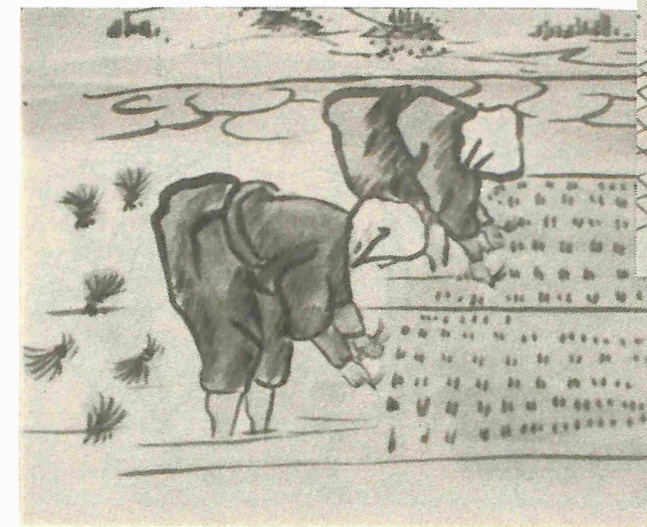
柄振り



回転式田植型



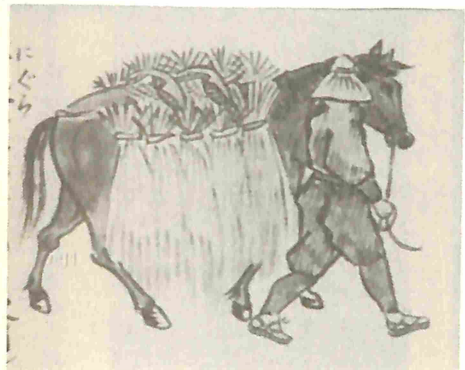
田植網



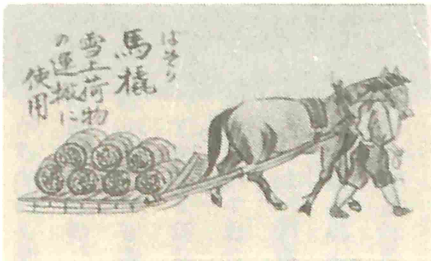
鎌



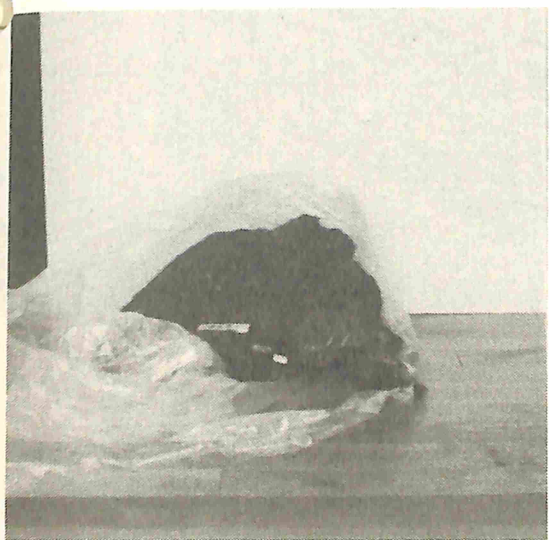
荷鞍



馬橋



トサネコ



昔の民間療法

秋元物之進

昔の農家は何処の農家も皆んな貧しかった。

いくら貧しくとも、両親は子供に貧しいのを見せまいと努力したが子供は薄々気付いていた。

昔を偲ぶと農家の人々は想像に絶する苦勞の連続であり、過度の重労働であった。二年か三年毎にやってくるヤマセ、日照不足による冷害、大雨が降れば川の堤塘が切れ、水田が泥の海と化す大洪水。突然に襲う飢饉、それでもこの地域は水田に頼る以外に仕事の道は無く、その日暮しの農村生活であった。

そのうちに悪疫流行、病気になるればその頃の人々は病気を排除するために、家内安全を神社やお寺、石塔碑、石塚に祈願した。それでも治らないと霊媒者（神霊・死霊の意志を語る人）イタコ、ゴミンなどの呪術を占ってもらうのが精一杯で、その日暮しの貧農には医者に診て貰うだけのお金の余裕が無かった。

私が幼い頃に嘉瀬のお寺に鍼灸師が時々来て患者を診ていた。鋭利な鍼先で患部の「ツボ」に針先を刺して病を軽くするのである。聞くところによると鍼は神経痛、リュウマチ、高血圧、その他に効くという。灸は疲労回復、センソク、心臓病、神経痛、その他に効くという。

また、嘉瀬の明治初期生れの老人がホウソウ（天然痘）に患り、顔一

面がアバタだった。種痘が行なわれる前は一生に一度は必ず患るものとして恐れられたと聞いた事がある。

昔の人は、病気にかかると、

- ▽厄年だから
- ▽神仏の祟りだから
- ▽家の方角が悪いから
- ▽死霊の祟りがある
- ▽狐が付いた
- ▽蛇、犬、猫、馬の祟り
- ▽仏壇の灯明が消えても
- ▽ご飯が焦げて赤くなっても
- ▽夜明けに烏が鳴いても
- ▽ニワトリが夜中に鳴いても
- 等々を原因と考えた。

無学文盲な貧農は病気になるっても医者に診て貰えず迷信に走り、神主や霊媒者にご託宣を依頼した。

クコ（枸杞葉・枸杞子・地骨皮）ナス科



ギンギン（羊蹄根）タデ科



ドクダミ（重葎）ドクダミ科



神社や霊媒者の呪術は、医学が進歩した今でも一部には根強く信仰している者もいる。私が幼い頃に聞いた話、また古老から聞いた軽い病気の民間療法を記憶をたどりながら綴って見たいと思う。

○脚気は昔から大抵の人が患った。脚気には麦飯と小豆汁が効くという。

○中風の予防にはクコの葉や根を干した物が効くという。

○黄疽には蜆貝。

○漆が出た人にはシノベ（ギンギシ）の葉を焙ぶってつける。また、ドジョウで擦っても良い。

○ネコモノ（皮膚の腫）にはドクダミの葉を貼る。

○火傷には、豆腐を塗るか、馬鈴薯のおろし。

○軽いシバレ（凍傷）には大根葉を熱い湯に入れていやす（シバレは晩になると痛痒くはてって寝つかれない。

○ヒビやアカギレには、烏瓜の汁を塗る。

○切傷にはフキの葉を揉んで汁をつける。

○顔に出来るカサにはドクダミを焼いて粉にしたものを貼る。

○キノコの食当りにはシナノ木の皮を煎じて呑む。

○冷え症の人はアケビの実を煎じ



アケビ (木通) アケビ科



キク科

て呑む。

○マムシ蛇は強壯剤で、マムシ酒。焼いて喰べてもよい。

○眼病には薬師神社の湧水で洗うと良い。

○イボ、コブ、アザには蛇の皮でこすると良いとか。また、地蔵様の前で、人に見られず箸でなぞて祈れば良いとか。

○神経痛には蜜蜂に刺して貰うと良いとか。

○結核には死人の墓の骨を砕いて呑むと良いとか。

○糖尿病にはフジバカマが効くとか。私はフジバカマの薬草は知らない。

○腎臓病には腫れを取るのにドクダミ。また、西瓜の皮を干した

ものや玉蜀黍の房を陰干にして呑むと良いとか。

○毒下しにはイヌノへ（ドクダミ）を煎じて呑むと解毒薬で、利尿、冷え症、腰痛、痔など風呂に入れて用いる。



フジバカマ (蘭草) キク科



ゲンノシヨウコ開花時(夏)の茎葉



センブリ (当薬) リンドウ科



キキョウ (桔梗根) キキョウ科

童謡

凧

日暮遊子

大凧

高い

小凧

お宮の

唸り凧

森の上

高い

お寺の

屋根の上

大凧

大凧

奴凧

小凧

ぐるぐる廻り

二枚凧

真っ逆さま

(編集部注) この記録は、昔から伝わってきた民間の薬草利用を古老からの聞き伝えと、筆者の記憶により書かれたもので、現在の漢方療法による薬草の用い方とは異なりますので注意を要します。

漢方薬とは、漢方医が、脈診、舌診、腹診、問診など、各種の方法を用いて病気の症状をよくみきわめ、そして、病気の徴候をつかみ、病人の体質診断を行なって、総合的に判断して治療に当ります。このとき、処方投与する薬は、幾種類かの生薬(和漢薬)を調合して用います。これを漢方薬といえます。 (山)

セレモニーは変わる ◆◆昔の葬式◆◆

山中正津

私事で恐縮ですが、標題を取上げるに至った心境を少し述べたい。

一九九五年九月弘前大学附属病院に入院していた。それも本人は少しも病気を感じていないのだ。耳も鼻ものども何んの故障もないのに「耳鼻咽喉科」へ入院したのである。最初、金木病院で五月の初めからいろいろな検査を受け、末になってから出た結論は「耳下線腫瘍（じかせんしゅよう）だから、耳鼻科のある西北中央病院へ紹介してやる。」と言われ、紹介状を持って西北中央病院耳鼻咽喉科の診察を受けたのは六月に入ってからだった。診断では、「腫瘍の場所は神経の走ってる所だから、手術が必要だが、手術は大病院でなければできないので紹介状を書く。」と言われた。自分は、右耳の下にちょっとシコリがあるようだという感じだけで痛くも痒くもないのに、何か大袈裟だなぁと思ったが、折角紹介状を書いてくれたんだから、一応行くだけは行ってみよう、翌日に弘前へと出かけた。大病院では三日間検査を受けた。検査の結果は六月末に教授の診断は「手術を要す。入院許可。」という事が出た。それも耳鼻科のベットに空きがないから連絡するまで自宅待機、というので待つこと二ヵ月余、九月の入院となったのである。その間何んの不自由もなく農作業をしてきたのに、入院したらその退屈なこと。

病人でもないのに（？）一日中にベットに寝ているという事も辛いも

のだと、つくづく感じたものである。

ラジオも聞き飽きたし、本も読み疲れた。

真白い病室の天井を見上げながら、ベットに横たわり、いろいろなことを考える。人間は一度死ねば二度と死ななくていいのに、どうしてこんなに生に執着を持つのだろうか。死ねばなぜ葬式をやるのだろうか。仏教の信仰心が爪の垢ほども無い者でも盛大な葬儀を行ない、見栄を張っている。式場に花輪や生花、供物がいっぱい供えられ、故人と面識もないような人たちも黒い服を着て参列し、僧侶の読経に生あくびを噛み殺して、早く終わってくれないか、と足のしびれを気にしている人も少なからず居るのではないだろうか。

私は、私の葬式を自分で演出してみよう。しかし、死んでしまえば、家族の者はどんな葬式を出すか、見る事が出来ない。そうだ、生前葬を営もう。

さて、葬儀の日程は何時にしようか、もし、それまで生きていたら喜寿を迎えた日にしよう。喜寿の祝いを葬式風にしたら楽しいだろう。

入院してから検査が三回あっただけで二週間も手術室へのお呼びがないものだから、退屈で退屈で異常な考えの浮ぶのも無理ないだろう。四階の病室の窓から最勝院の五重の塔が見える。生前葬はどんな形式

でやったらいいだろう。仏式か、神式か、クリスチャンではないからキリスト教式ということはないな。やはり仏式とするか。

ということまで前文句が長くなったが、葬式について調べてみることにしたのである。

昔の葬式

いよいよ本題に入る。

書物によれば、青森県には仏教会に加盟しているお寺だけでも五五八寺（曹洞宗二六八、浄土宗一一四、日蓮宗六五、浄土真宗六二、天台宗九、真言宗二七、臨済宗七、その他六）もあるという。

世界の三大宗教（仏教、キリスト教、イスラム教）のうちアジアに広く普及された仏教が我が国へ伝来したのは五三八年（一説には五五二年）と云われるから、今から約一四五〇年ほど前から布教されていたのだから日本人には米の飯と同じように、信仰心のある者も無い者も身体に染みついてしまっているのかも知れない。

そこで仏式による葬式について、昔の事を思い出してみよう。

その前に今の葬式を見ると、その順序は地域によって、また宗派によって違いがあるが、当地方では、葬式の前日に通夜を営み、禅宗、浄土宗、日蓮宗では、導師（檀那寺の住職）入堂、司会から開式の辞、読経（読経中に廻し焼香）、導師説教、喪主あいさつ、閉式の辞、出席者に故人を偲んでの飲物（酒、ビール、ジュース等）のもてなしで終り、翌日の葬儀は、導師入堂、開式の辞、読経（引導）、弔辞・弔電披露、読経、焼香（喪主および遺族、親戚、一般会葬者）、導師退堂、喪主あいさつ、閉式の辞で終る。

浄土真宗（門徒宗）の場合の通夜では、導師入堂、開式の辞、合掌総礼、読経（読経中に廻し焼香）、合掌総礼、導師法話、喪主あいさつ、導師退堂、閉式の辞、喪主から飲物の接待があつて終る。翌葬式は、導師入堂、開式の辞、合掌総礼、読経焼香（喪主ならび遺族・親戚、代表者、一般会葬者）、弔辞、弔電披露、合掌総礼、喪主あいさつ、導師退堂、閉式の辞を以つて終了する。

その後、喪主は、お使いをした方たちと共に中陰の法事を取り行い、お墓へ納骨、帰って来てから会食というのが一般的である。

それでは、今と昔とどんな点が違ってきたのか。

そもそも葬式とは、（次に、民俗探訪事典より引用する。）

『今日、葬式といえは送る儀式とのみ考えられている。しかし、葬式には、死の前後における儀礼から入棺、通夜の儀礼、葬儀と野辺送り、さらには墓葬礼に至るすべての儀礼がふくまれる。順序としては、まず肉体から離れた死霊を一度肉体に帰そうとする儀式（たまよばい、枕飯、末期の水など）、ついで僧侶の引導に代表される肉体から離れた霊魂を分離させて位牌などに引き移す儀礼、そして分離した肉体と霊魂を墓地へ送付するという形で進められる。』

葬法には、水葬・火葬・土葬のほか、野において鳥や獣に任せる林葬、さらには風葬（爆葬・洞窟葬）、死体保存（ミイラ）などの方法がある。洞窟葬は沖繩その他にみられ、ミイラは出羽三山のそれが有名である。今日は火葬が優勢であるが、かつては土葬による方法がより一般的であった。』

というようにことださうで、現在の葬式に野辺送りが無くなったのである。時代と共にセレモニーも変わってゆくということか。

昭和初期の「弔い」を記憶の奥から呼び戻してみよう。

病気で亡くなるのは殆んど自宅である。今みたいに病院に入院して息を引き取るというのは稀で、入院出来るのは、村でも指折りの裕福な旦那衆（金持の意味）に限られていた。一般の農家では、医者や往診すら余程でなければ受けられないのであった。医者に診てもらいたい。しかし往診料を払うお金もない。病人は寝た切りでとても歩行ができないという場合には、親戚の者か、隣近所の若者を頼んで戸板に乗せて、医者の居る町へ運んで行く。隣り町の金木まで、少し遠いが五所川原まで。交代要員も付いて数時間かけて歩いて行くのである。そのころはタクシーなど無い、乗合自動車は一日に何往復か走るが勿論戸板を乗せるわけにはゆかない。津鉄の汽車も同様である。

そのように苦勞して病院に着いても、殆んどは手遅れで生きて帰ってくる人は、池の中に落したアメ玉を探すようなものだ。

病院で死亡し自宅へ遺体を運ぶ時は「サア、家へ帰るぞ」「家へ帰ったよ。」と声をかける仕来りになっている。

死者を湯灌のたらいの中へ入れて洗う際、体をおこしつかまえるのは喪主の役目で、必ず「ソラ、起すヨ」とか「オイ」とか「サア」とか声をかけて、親の場合は子が、子の場合は親又は兄弟が、口に白紙をくわえて、脱脂綿で体を拭いてやる。それが終わってから入棺になる。

使い終わった湯は、堆肥盛に捨てるか、土に穴を掘って捨てる。

病人が息を引き取った時は、親類、縁者に先ず知らせる。親が死んだ場合は長男（後継ぎ）が、子の時は親が喪主となる。檀那寺の和尚に知らせ枕経を読んでもらう。和尚に連絡する寺使いは袋に米を一升入れて持って行く。この米はお寺への謝礼の意味か、死人の魂がその袋の中

に入っていくのだともいわれている。

医者が臨終を告げた後、遺族は急に慌しくなる。歎き悲しんでばかり居られない。部屋の片付けから、葬式の準備をしなければならぬ。

死者を北枕に寝かせる。死者がまだ眼を開いていれば、指で軽く瞼を下の方へ撫でおろしてやる。自然に眠ったように、安らかな顔だちにしてやるのだ。次に胸の上で両手を組ませ合掌させる。死体が硬くなつてからは出来なくなるから早くする。死者の布団の胸の上あたりに、小刀とか剃刀を、刀を死者の顔の方に向くようにしてのせる。これはこの刃物によって悪魔を払う意味である。飼猫などが近寄りぬように誰かが、常に傍に居てやる。枕元へは枕屏風を逆さに立て、その前に小枕を置いて、一本花、香炉、（一本線香）ろうそく一本、水、一膳飯などを供える。死者の顔には白布をかけてやる。

嘉瀬には、二つの庵寺があり、浄土真宗は門ト寺の明誓庵で、門徒宗以外の他宗は妙光庵で葬式が行われた。二つの庵寺は明歴一年（一六五五年）に建立と推定されている。

（昔、聞いた話である。お寺には、死者の霊魂（タマシコ）が寺使いのくる前に来ているという。流しの方でカタコト音がすれば女であり、本堂の方で音がすれば男であるという。これは誰にでも聞こえるという訳ではなく、庵主が『南無阿弥陀仏、ナムアマミダブツ』と口の中で唱えれば、静かになってゆく。それから暫く経ってから寺への知らせが届くという。）

香典についての話である。香典は、死者の霊前に香を供えるための金銭であるが、昔は、相互扶助の意味も含まれていた。今でもそうだが、貰った分の金額は返す（その時代の金銭の値いを換算して）。昔は、貧乏

人は本当に貧乏で、葬式の手伝いにくる人達への食事を出す事も、また、火葬にする薪も支度できなかったのである。それで香典の金額は少なく（式拾銭とか、多くて五拾銭ぐらい）して、物品を持ち寄った。手伝人に食べさせるための「豆腐とか油揚げ、コンニャク」等、またキノコや野菜など。親類縁者からは、米・味噌・野菜・少しまとまった金銭を出してくれる場合もあるという。

霊前に供える供物も、箱菓子のほか、ウドン、ソーメン、ハルサメ、ユバなども実用的で多く用いられた。

これは書物で読んだのであるが、他県の例です。「伊奈」では、親子兄弟では米一俵、親戚は麦一俵。いとこは精麦五升持つてくるほか、区の人全部が麦一升、念仏講の人たちは米少しを味噌こしぎるに入れて余分に持つてくる。

「愛媛県」のある村では、親類縁者は香典と別に白米一升をそえて贈り、「元火を食う」といって亡者の家で飲食して内部の手伝いをする。一方講仲間の方は、白米一升到野菜を持ち寄り、喪家の隣家を借り、元火を食わず外部の手伝いをするのである。

「山形県」には一升とむらい、二升とむらいの名があり、兄弟からいとこまでの義理（米五升と酒一〜二升）を本つとめ、遠く離れている親の兄弟などの義理（米二〜三升と一般の見舞金）を半つとめと呼ぶところもあり、「岐阜県」で、古い親類が一升持ち、新しい親類が二升持ち、などきめている場合もある。

当地方でも、二升持ち、なる言葉は、古老の口から今でも聞かれることがある。親類は当然、祝儀、不祝儀を問わず二升持ち（これは酒）であるが、兄弟分の盃を交している親しい友人の場合を指す。祝言でも、

葬式でもお使を（招待）して、使を受けた者は二升の酒を持つてゆく。（当時の清酒は高価で、普段は百姓の口には入らなかつた。）それほど親しい関係（親類同様）を示す時に用いられる言葉である。

香典について、もう一つこんなことも本に書いてあったので、次に記す。「仏教国ビルマ（現在のミャンマー）では、少なくとも戦中までは、とばくを日常打ってはいけませんが、人が亡くなった時に限り許可されたのだという。（通夜の晩に、みんな寺に集つてきて、本堂でご開張となり、寺の和尚が横座に座り、参会者から寺銭をとって仏様の前に積むんです。いくら集つたか最後に公表されますが、この寺銭で次の日の葬式、さらに法要の予算を立てるわけです。）」弘前・正伝寺・長谷川達温住職「青森県葬儀あれこれ」より）香典のルーツは「とばく」であったとは意外である。とばく開張の胴元が集める手数料を「寺銭」というのも、これでナットク。

今度は薪である。折角親類縁者、隣り近所から主食・副食の持ち寄りがあつても、これを煮炊きするに必要な薪がない。人が大勢集つて、御馳走を作るといふのに、普段使っている豆殻やワラを燃すのでは、あまりにも能がない。ばかりではなく、間に合わないのである。

どうしても必要なのは、火葬する時の薪である。親戚に裕福で気前の良い方でも居て、薪を提供してくれば一番良いのだが、なかなかそのようになつてはいかない。やはり相互扶助に頼るしかない。町内の人たちはそれぞれ二〜三本づつの薪を持ち寄るのです。それを焼場へ持つて行く量を別にして、手伝いに来ている男衆が、かまどに入れ易い長さに切つたり割つたりする。火葬用にする程集まらない時には、若者が二〜三人で山へ薪を切りに行く場合もある。葬式の朝までには、火葬用の薪はちや